

現代短歌大系 1

釋 迢空
會津八一

齋藤茂吉

責任編集

大岡信・塚本邦雄・中井英夫

現代短歌大系 1

齋藤茂吉

釋 迢空

會津八一

三書房

現代短歌大系 第一卷 (全十二巻)	一九七二年十月三十一日 第一版第一刷発行 一九七二年十一月三十日 第一版第二刷発行	編者 大岡 信 塚本 邦雄 中井 英夫 ©一九七二年	発行者 田川 敬吾 株式会社 三一書房 東京都千代田区神田駿河台二の九 電話〇三(二九)三三三番 振替東京 八四一六〇番	印刷所 第一印刷株式会社 製本所 株式会社鈴木製本所
--------------------------	--	--	---	-------------------------------

0392-729801-2726

現代短歌大系

第1卷 目次

齋藤茂吉 ————— 003

釋 迢空 ————— 137

會津八一 ————— 277

解説 上田三四二 ————— 329

解説 上田三四二

編集協力 齋藤 慎爾

篠 弘

正津 勉

富士田元彦

装幀 渋川 育由

齋藤茂吉



齋藤茂吉 略歴

明治15年5月、山形県に生れる。明治29年、上山尋常高等小学校高等科卒業、東京府開成中学校入学。同35年、第一高等学校入学。在学中、子規の『竹の里歌』に感銘を覚え作歌に努む。同43年、東京帝国大学医学部卒業、大学教室及び巢鴨病院に勤務。同41年、発刊した「アララギ」の編集経営に尽力。大正2年、処女歌集『赤光』を刊行。同6年、長崎医学専門学校教授。同10年、ウィーン及びミューンヘンに留学。昭和2年、青山脳病院長。実地診療、病院経営のかたわら作歌に専心。昭和28年2月25日、心臓喘息により死去。主要著書『短歌寫生の説』（昭和4年）、『柿本人麿』（大正15年）、『萬葉秀歌』（昭和13年）、『明治大正短歌史』（昭和25年）『齋藤茂吉全集』（全56巻）

齋藤茂吉 目次

白き山

(完本)

——007

抄

——091

小園 つきかげ

齋藤茂吉論

吉本隆明

——123

「抄出について」

歌集「小園」の戦後の歌から一〇〇首、歌集「つきかげ」から二五〇首を抄出した。

「小園」の戦後の歌の判別には、全集第四十五卷所載の著者の手記を参照した。「つきかげ」の歌には、編集に漏れた歌一首を全集第五十六卷の短歌補遺に依って増補した。

柴生田 稔

白き山
(完本)

目次

昭和二十一年

大石田移居（五首）	〇二	虹（十七首）	〇四
みそさざい（五首）	〇一	秋來る（十一首）	〇五
ふくろふ（五首）	〇三	秋（五首）	〇六
大石田漫吟（十七首）	〇三	松山（五首）	〇七
病床にて（十一首）	〇四	最上川下河原（十一首）	〇七
鴨（五首）	〇五	對岸（四首）	〇六
春深し（五首）	〇五	弔森山汀川君（六首）	〇元
吉井勇に酬ゆ（五首）	〇六	海（八首）	〇元
岡麓翁古稀賀（五首）	〇六	浪（二十六首）	〇三
陸奥（五首）	〇七	鳥追ふ聲（五首）	〇三
罌粟の花（五首）	〇七	大石田より（十一首）	〇三
聽禽書屋（五首）	〇八	山と川（十一首）	〇四
夕浪の音（五首）	〇八	しぐれ（十一首）	〇五
螢火（五首）	〇九	晩秋（十一首）	〇六
弔岩波茂雄君（八首）	〇九	鷹（十四首）	〇七
露の臺（五首）	〇〇	新光（八首）	〇六
春より夏（十四首）	〇〇	年（八首）	〇元
黒瀧向川寺（十七首）	〇三	ひとり寐（十一首）	〇四
曇き日（五首）	〇三	をりをり（五首）	〇四
		寒土（十一首）	〇一

越年の歌(五首)……………	〇四二	樹蔭山房(十一首)……………	〇六七
逆白波(五首)……………	〇四三	本澤村(五首)……………	〇六六
北國より(五首)……………	〇四三	胡桃の花(五首)……………	〇六八
歳晚(五首)……………	〇四四	猿羽根峠(十七首)……………	〇六九
昭和二十二年……………		露伴先生頌(十一首)……………	〇六九
雪の面(五首)……………	〇四四	横手(五首)……………	〇七一
新年(五首)……………	〇四五	秋田(五首)……………	〇七二
黒どり(十一首)……………	〇四五	八郎潟(二十九首)……………	〇七三
雀(十一首)……………	〇四六	田澤湖(十一首)……………	〇七五
寒月(十一首)……………	〇四七	角館(五首)……………	〇七六
あまつ日(五首)……………	〇四八	奉迎(五首)……………	〇七七
ひとり歌へる(四十一首)……………	〇四九	晩夏(五首)……………	〇七七
山上の雪(五十三首)……………	〇五三	田澤村の沼(五首)……………	〇六八
東雲(二十九首)……………	〇五七	次年子(五首)……………	〇六八
晝と夜(十一首)……………	〇五九	推移(十一首)……………	〇六九
春光(十一首)……………	〇六〇	肘折(十一首)……………	〇六〇
邊土獨吟(三十一首)……………	〇六一	もみぢ(十一首)……………	〇六一
四月(五首)……………	〇六二	冬(五首)……………	〇六二
ゆきげ雲(五首)……………	〇六五	秋山(五首)……………	〇六三
雪解の水(五首)……………	〇六五	酒田(十一首)……………	〇六三
洪水(十一首)……………	〇六六	象潟(五首)……………	〇六四
白頭翁(五首)……………	〇六七	湯の濱(五首)……………	〇六四

湯田川（五首）		〇五
恩（五首）		〇五
狹閑田（五首）		〇六
蓬生（五首）		〇六

鹽澤（五首）		〇七
後記		〇八

昭和二十一年

大石田移居

藏王より離りてくれば平らけき國の眞中に雪の降る見ゆ

朝な夕なこの山見しがあまのはら藏王の見えぬ處にぞ來し

かりそめの事と思ふなふかぶかと雪ながらふる小國に著けば

最上川の支流の音はひびきつつ心は寒し冬のゆふぐれ

さすたけの君がなさけにあはれあはれ腹みちにけり吾は現身

みそさざい

しづけさは斯くのごときか冬の夜のわれをめぐる空氣の音す

あまづたふ日の照りかへす雪のべはみそさざい啼くあひ呼ぶらしも

雪の中に立つ朝市は貧しけど戦過ぎし今日に逢へりける

あかあかとおこれる炭を見る時ぞはやも安らぐきのふも今日も
おしなべて境も見えず雪つもる墓地の一隅をわが通り居り

ふくろふ

わが眠る家の近くの杉森にふくろふ啼けり春たつらむか

純白^{ましろ}なる藏王の山をおもひいで藏王の見えぬここに起臥^{おきふ}す

最上川みづ寒けれや岸べなる淺淀^{はな}にして鮪^{はち}の子も見ず

朝な朝な惰性的に見る新聞の記事にをのく日に一たびは

ここにして藏王の山は見えねども鳥海の山眞白くもあるか

大石田漫吟

最上川ひろしとおもふ淀の上に鴨ぞうかべるあひつらなめて

ここに^{あめ}して天の遠^{とほ}くにふりさくる鳥海山は氷糖^{ひようたう}のごとし

三月一日今宿

三月二日炭坑道

雪ふれる鳥海山はけふ一日^{ひつひ}しづかなる空を背景とせる

わたくしの排悶はいもんとして炭坑に行かむはざまに小便したり

うつり來て家をいづればこころよく鳥海山高し地平ちへいの上に

山中の雪より垂るる氷柱つらちこそ世の常人つねびとの見ざるものなれ

三月さんぐわつになりぬといへるゆふまぐれ白き峽かひより人いでて來し

寢ぐるしき一夜ひとよなりしが今朝けさの朝け泡雪あわゆきぞ降る高山こめて

四方しほうの山體がいがい々として居りながら最上川に降る三月のあめ
三月三日

眞白なる鳥海山てうかいざんを見る時に藏王ざわうの山をわれはおもへり

わが庭の杉の木立に來るる鳥何かついばむただひとつにて

かがなべてひたぶる雪のつもりたるデルタとわれと相むかひけり
三月四日

横山村を過ぎたる路傍には太々ふとふとと豆柿みなみひなたの樹は秀でてゐたり

三月の光となりて藁靴とゴム靴と南日向に吾はならべぬ

齒科醫より歸りし吾はゆふまぐれ鬱々として雪の道ありく

三月六日

洞窟となりて雪なきところありそこよりいづる水をよろこぶ
 厚^{あつ}なる曇りとなりてけふ一日^{ひとひ}雪ふれる上の空はうるほふ

病床にて

杉の木に杉風^{すぎかぜ}おこり松の木に松風^{まつかぜ}が吹くこの庭あはれ

日をつぎて吹雪^{ふき}つのれば我が骨^{ほね}にわれの病^{やまひ}はとほりてゆかむ

よもすがらあやしき夢を見とほしてわれの病^{やまひ}はつのらむとする

ふかふかと積りし雪に朝がたの地震^{ちしん}などゆり三月^{さんぐわつ}ゆかむとす

最上川みかさ増^{まさ}りていきほふを一目^{ひとめ}を見むとおもひて臥^ふしある

飛行機の音のきこえし今日の午後われは平凡^{まうざう}なる妄想したり

さ夜中と夜は更けたらし目をあげば闇にむかひてまたたけるのみ

生きのこらむとこひねがふ心にて歌一つ作る鴉の歌を

あたたかき粥^{はうれんさう}と菠薐草とくひし歌一つ作らむと時をつひやす